

敗戦の日から、引揚げまで

京都府 山崎 隆

はじめに

両親がいつ本溪湖に居住するようになったのかは正確には分からないが、私が昭和四(一九二九)年の八月七日生まれであることから考えてみると、父は結婚して間もなく本溪湖煤鉄会社に就職し、新婚の母を連れて本溪湖に移って来たものと思われる。

最初は南山にあった木造の社宅で生活をしていたらしい。私はそこで生まれ育ったのだ。当時としては珍しいことらしいが、二年保育の幼稚園に、ただ一人で通っていた。

幼稚園の一年のときに、母が病気で亡くなった。そのためにそれから約一年は、新京にいる親戚の家に預けられた。その期間と、その後父の仕事の関係で新京に転動した約一年半を合わせた約二年半を除いた、約十五年間を、南山、東山、そして宮原北地の三ヶ所の煤鉄会社の社宅

で生活した。幼稚園、小学校、そして中学校四年で引き揚げるまで、本溪湖市に住んでいたことになる。小学校五年生の途中までが南山と東山で、それから引き揚げるまでが宮原北地であったが、記憶に残っている宮原北地での体験から、私の引揚げ労苦記録をまとめることとする。

一 敗戦の日まで

昭和二十年八月九日の早朝、突然に本溪湖市全域に空襲警報のサイレンが鳴り響き、ラジオからは「今日の飛行機は、南からではなく北の方から襲って来る」と報じていた。みんな不思議に思ったが、それ以上のことは考えることなく、朝食後、いつものとおり勤労働員学徒の集合場所に集まり、隊列を組んで煤鉄会社のそれぞれの勤務場所に向かった。

まだその時点では、ソ連軍の不法な参戦の情報は私たちには届いていなかった。勤務場所に到着するや、ただちに全員集合の号令がかかった。いつもの朝礼かと軽い気持ちで集合したが、そこで初めてソ連軍の参戦のことを知らされた。その場で動員解除となり、我々は先生の指示に従って学校に向かった。学校に戻ると、休む間もなくシャベ

ル、つるはしなどを持たされて、太子江に架かる鉄橋を望める山頂に出発して、八月十五日の正午、終戦の放送を聞くまで、対戦車壕と自分たちの入るたこ壺を掘っていた。

終戦の重大放送は、近くの水道局関係の二軒の官舎のラジオを聞かせてもらった。どのラジオも雑音がひどくて内容がよく聞き取れなかったが、いろいろと総合すると、どうやら「日本が負けて、戦争が終わったらしい」ということが、おぼろげながら分かった。すぐに現地で解散し、それぞれの家に戻ることになった。

その翌日、学校に登校し、校長先生たちとご真影、勅語を始め重要書類などの焼却をした。歴史ある本溪湖中学校も、この時点で廃校となり、私たち中学生も学校を追われて難民となった。

私は今でもソ連軍が日ソ中立条約を一方的に破棄して、満州に侵攻して来た日だから終戦と思っている。

二 終戦と日本人社会

終戦の八月十五日の午後から、本溪湖の日本人社会の生活環境は完全に变化した。銀行と郵便局の貯金からは、

一銭も払い出しができなくなった。また、地元の中国人の我々に対する態度は百八十度も変わってきて、かなり横柄になった。物価も上がり、特に食料品は高くなったが、終戦以前よりも豊富に出回っていたようだ。しばらくではあったが、我が家でも白米のご飯を食べることができた。従来の統制経済の配給生活に対する反動であったかもしれない。

しかし、良いことばかりではなく、一番問題の治安が悪くなってきた。中国人による日本人社宅への襲撃のうわさが、しきりに流れてきた。我々も、戦時中に組織された隣組制度を復活させて、隣組による夜警団を作り、日没から夜明けまで木銃などを持って交代で社宅街の巡回警備をしたが、幸いに一度の襲撃も無く過ごすことができた。そのようにしてソ連軍が進駐して来るまでは、何とか治安を維持していた。しかし、夜間の暗闇の中での巡回は恐ろしいことで、今でもときどき思い出しては身震いしている。

収入の途絶えた日常生活では、少しでも現金を得るがために、物々交換が始まった。中国人を相手に、衣類や貴

重品などと食べ物とを交換していた。

九月の初めごろまでは、不安な中でも今までと同じような生活を、何とかまがりなりにも続けることができた。一つだけ大きく違っていたことは、通勤・通学ということが無くなったことであつた。毎日家において、その日をどのようにして過ごすかと考えることも、最初のころは楽しみでもあつたが、だんだんと気持ちが悪くなつてきて、苦しみに変わつていた。

近いうちに、ソ連軍が進駐して来るといううわさが流れていて、社宅街の近くにあつた宮原小学校に駐屯していた日本軍も、武装解除されるということを知つた。その以前に、傷病兵は本溪湖女学校に移動したとのことだつた。

三 ソ連軍の進駐

昭和二十年九月二十日、ソ連軍の先遣隊が本溪湖に進駐し、翌二十一日には早くも本隊が到着した。その総兵力は約六百人とのことであつた。ただちに煤鉄公司を接収して、すぐに諸設備を解体し、諸資材を没収していた。ソ連軍進駐と同時に、宮原小学校に残留していた日本軍は、一ヶ所に集められるために校舎から出て行つた。

無人となつた校舎には、武器・弾薬などは全然残つていなかったが、軍服などの軍装品、食料品など当時一般家庭で不足していた生活必需品が、きれいに整理・整頓されて山積みに残されてあつた。私たちは昼日中に、それを盗みに校舎に入った。新しい軍服のズボンを今履いているズボンの上に重ね、上衣は二枚ぐらゐを重ね着して、さらにその上から外套を羽織つた。これから生きてゆかねばならぬという大義名分はあつたものの、泥棒は悪いことという感覚は薄れていた。終戦からまだ一カ月余りしか過ぎていないのに、日本人の持つていた秩序感は崩壊していった。「有る所には、有るものだ！ 一つや二つぐらゐ無くなつても分かるまい。どうせ末はソ連兵が持つて行つてしまふのだから！」という気持ちが道義心に優先していったのだつた。だが、さすがに一人で実行するには気が引けて、数人の仲間を集めて校舎に入つていた。夢中で物色していたところに、一人のソ連兵が「マンドリン」と称する自動小銃を構えて現れた。私たちは全然気が付かずにいた。ふと顔を上げると、すぐ目の前に赤ら顔のソ連兵の姿があつた。びっくりして、重ね着をしていた衣類やポケットにねじ込んでいた物を、

すべて投げ出した。ソ連兵がその品物を手に取って見ている間に、私と同級生の一人は窓から飛び出して一目散に逃げた。軍事教練で教わったように、塀に沿って走り、塀が途絶えたと匍匐前進をした。とんだところで、かつての軍事教練が役に立ったものだ。残った者も、手に入れた物すべてを差し出して無事に戻ったことだった。

その翌日には、ソ連軍本隊が宮原北地にあった煤鉄公司の独身社員寮の、大和寮と女子寮に入った。住宅の前を通るソ連軍に向かって、手作りのソ連国旗の小旗を振って出迎えた。あまり愉快なことではなかった。

ソ連軍の進駐によって、本溪湖の街の治安は一気に悪化してきた。略奪・暴行などは日常茶飯事のこととなり、日本人ばかりでなく中国人も朝鮮人も襲われて、いろいろと被害がでた。日本人の中には、男装の麗人が増えてきた。きれいな黒髪をばっさりと切つて坊主頭になり、晒木綿で胸をきつく巻いて、ふくらみを隠した。その上から父や兄の背広を着て、男姿になっていた。ソ連兵が侵入すると、その姿で天井裏や床下に隠れていた。それでも、野獣化したソ連兵の臭覚は鋭く、徹底して探していた。

被害は日増しに大きくなっていったようだが、大部分は闇から闇に葬られていて、真実ははっきりと分からない。被害が広がるようになってきたので、だれの発案か定かではないが、本溪湖にいた芸者衆を防波堤にして、ソ連軍専用の慰安所が宮原北地の近くに設けられた。慰安所は、ソ連軍の撤退まで続いていた。この人たちの犠牲的行為によって、多くの人が安としたものである。

このような暗い出来事の反面、煤鉄公司の撤収作業は、失業状態だった日本人にとっては救いの神であった。作業員として働いて労賃稼ぎができた。中学四年生の連中も作業員に雇われていた。

朝八時、女子寮の前に各人めいめいに工具を持参して集まる。そこに、迎えのアメリカ製のトラックがやって来る。持参した工具の種類によって作業場所が決まる。金槌、鋸などを持参の者は、木枠、木箱造りに回された。だから作業は比較的に楽だった。社会・共産主義の国だけあって、賃金は中学生であっても一日三円は間違いなく払ってくれた。私も通用ぎりぎりの満州国一円の継ぎ接ぎだらけの紙幣で、約一カ月働いた。

四 八路軍の進駐

九月、十月の二カ月は、ソ連軍による機械その他の設備撤去などに明け暮れたが、十一月になると八路軍が進駐して来た。軍、警察、そして行政などにかかわっていた日本人幹部は、ほとんどの人が戦争犯罪人として検挙されて、人民裁判にかけられた。まるで報復手段のごとくに、あっちこっちで人民裁判が盛んに行われ、死刑にされた人も多かった。

それと同時に、八路軍の幹部・家族を收容するためにそれまでソ連軍が接収していた建物以外に、新たにあらこちらで接収されていた。私たちの住んでいた宮原北地の社宅も接収されて、私たち一家も知人の家に移り、同居することになった。家を立ち退く際に、家の電灯線を外して持つて行った。

翌日、八路軍が社宅に入ってきた。初めて見る八路軍の兵士は、足首から膝下まで同じ太さでゲートルを巻いていて、そのゲートルの外側に、箸やスプーンやフォークなどを付けていた。兵士の姿としてはあまり格好の良いものはなかった。その夜は、社宅では電灯線を外してあるので、

電灯のつかない一夜を過ごしたようだ。

翌日になると、ドライバーやベンチを持って街中をうろついていた中学四年生の我々を連行して、電灯がつくようにせよという使役にかり出された。彼らは、電灯がついたびに驚きの声をあげていた。そして「こんな子供でも簡単に工事ができるのに、なぜ日本は戦争に負けたのだろうか？」と呟いていた。十軒ほどの工事を終えた後、社宅地の中心部にある旧配給所の倉庫に連れて行かれた。そこには、どこで押収してきたのか、山のように積まれた中国式の綿入れ服の上下があった。その中から、各人に上下一着をくれた。ちょうど冬の極寒期に入るところだったので、大変に助かった。私はこの一冬をこの中国服で過ごした。これを着ていると姿・形は中国人のように見えるが、私は眼鏡を掛けていたので、すぐに日本人であることが見分けられた。それから、容赦無く使役にかり出される毎日となつた。

父は、中国語の二等通訳の資格を持っていたので、そのころやっとできた宮原北地社宅の日本人会の世話役の一人として、居留民の奉仕に携わっていたので、私も連絡員

として事務所に常駐するようになった。

落ち着かないままに昭和二十年が過ぎ去り、一人の事が流れてきて、八路軍が苦戦をしているらしいとの話が伝わっていた。そして同時に、十五歳以上のぶらぶらしている男性は、八路軍の使役として徴集するということが達せられた。私はこの徴集から逃れるために、知人の紹介で宮原の満鉄の機関車庫に職を得て、給水係として働くことになった。冬期において凍結した給水機の修理などをした。

八路軍の戦勢は次第に悪くなり、機関車庫の施設、設備も南の方に移動を始め、私の職場もとうとう閉鎖されてしまった。配置転換によって回された職場は、機関車を走らせるための豆炭造りの作業場で、そこで昼夜二交替の使役となって、粉炭をコールトールで練って豆炭を作っていた。しかし、ほどなくして南への移動が終わるにつれて中止となった。確か、昭和二十一年の四月下旬のことだったと記憶している。

四月の末ごろのことだったが、ある日突然、残っていた隣

組に対して、二、三人の男性使役を出すようにという命令がきた。既に私の隣組には、働き盛りの男性は私以外にはだれも残っておらず、私が出て行くことしかなかった。私は命令どおりに、スコップ一丁、八路軍発行の紙幣で二十円ほどを持って宮原駅前に集合した。集合した人の中には、中学時代の恩師で、中国語の先生だった森岡先生の姿も見受けられた。いつ！どこに！向かうのか分からないままに、遅い夕食がでた。高粱飯であった。これからどんな運命が訪れるのか全く不明のまま、腹いっぱいになり飯を詰め込んだ。しばらく休憩するように達せられて、思い思いの所で仮眠をしていた。

そのうちに、全員集合の号令がかかり、持参したスコップなどはその場で集められて、置いて行くように言われた。そして、その代わりに四人一組に担架が渡され、真夜中に宮原駅から石橋子方面に出発した。列車は来ないので、徒步行軍であった。前の方には八路軍の兵隊が一团となって歩き、その後には荷馬車が数台続いていた。荷馬車には、何が積まれているのかは分からない。そしてその後には、我々の徴用日本人が担架を持って続いていた。みんなは担

架を持ちながら黙々と歩いてきた。さらに、我々の後にも兵隊の一団が続いた。暗い夜道を、本溪湖の旧市街に向かつて歩いてきたようだった。我々は、小声で「一体、どこに連れて行くのか？」と話し合いながら進んでいた。本溪湖の旧市街を通り抜け、中国人街を抜けて、真つ暗な山中の道に入った。途中での休憩もほとんど無く、歩きづめだった。

やっと夜が明けたころに、火蓮塞と思われる所の、中国入部落の地主の庭に到着した。そこで高粱飯の朝食を食べ、携行してきた担架をひとまとめにして置いた。庭から出るよう指示されて集合し、そこでトロッコ用のレールを二人一組となり一本ずつ担がされ、左前方の山頂に運ぶ作業が開始された。

運搬中に、突然に戦闘機二機の爆音がしたと思ったとたんに、機銃掃射を受けた。驚いた私たちは、レールを畑の中に放り出して、畦の間に伏せて息を殺していた。一息ついて恐る恐る頭を上げて上空を見上げると、国府軍のマークをつけたP40型戦闘機が乱舞していた。翼の背後から黒煙が出ると同時に、銃撃音が響いてきた。すべての弾が

私の方に向かつて来るように感じた。先の戦争中にも経験したことの無いことで、ただひたすら畦の間に少しでも体を低くして伏せているだけだった。そのとき、ふと頭を浮かんだことは「こんな所で死んではいけない。無事に宮原北地の家に帰ることだ。そのためには、どうすればここから逃れられるか？」ということだった。

戦闘機の姿が見えなくなると、ただちにレールを担がされて、山頂に向かった。頂上に着くと、ほかの地区からの使役の日本人が、塹壕掘りをさせられていた。その横にレールを置き、またすぐにレールを運ぶために下山させられた。それをもう一度繰り返して、再び下山している途中で、向かい側の山を既に占領していた国府軍から一斉射撃を受けた。宮原駅から一緒に出発した日本人使役は、安全な所に向かつてばらばらになって逃げ出した。私たち七人は、近くの土手に伏せて日が暮れるのを待つことにした。ちょっとした姿勢や動作を見せると、すぐに一斉射撃を受けるので、動くことをしないようにへばり付いていた。

そのとき、私たち使役グループのリーダー格のような立

場にいた軍隊経験のある人が、携行していた飯盒には高粱飯がぎゅしりと詰め込まれ、その上にキュウリの味噌漬けまであった。それを七人で分け合って空腹をしのぎ、ときを待った。

ころ合いを見計らってそこを飛び出して、元の中国人部落に向かった。途中で多少の射撃を受けたが、幸いに何ともなく一軒の家に飛び込んだ。そこで水を飲ませてもらい、一息ついた。

前方の山を占領している国府軍は、かがり火を焚いてその存在を誇示していた。その家の中国人は、明朝、国府軍と一緒に本溪湖に帰ることを勧めてくれたが、リーダーを始め私ともう一人の男性以外の人たちは、家族が宮原で待っているのです、どうしても宮原に戻りたいということで、昨夜来た道を行くとのことだった。私たちもここで置いて行かれてはということで、一緒に行動することとして、担架を置いた地主の家にいき、担架を持ち出した。その際、一人の日本人が同行させてくれということから、八人のグループとなり、担架二台を持って夜道を宮原に向かつて出発した。

五 担架隊として

夜道を出発した八人は、二台の担架を持って歩き出したが、百メートルぐらいの間隔で八路軍の歩哨がいて、その都度「だれか！」と誰何された。そのたびに「日本人の担架隊だ！」と答えながら進んでいたが、ある山間の、そこだけ少し平地になっている谷間に差し掛かったときに、昼間の戦闘で退去していた八路軍の部隊に捕まってしまった。その部隊には、負傷兵が数人いた。重症の二人の兵隊は、既に中国人八人の担ぐ戸板に乗せられていた。私たちの担架を見て、一人ずつ負傷兵を担ぐように指示され、警護の兵隊を一人つけられて本溪湖に向かった。

四人で担いでいても、担い棒が肩に食い込み苦しい歩行だった。やっと本溪湖の中国人街の入口近くまで来ると、夜中なのに明かりをつけて食べ物売っている店を見つけ、私も買うつもりで話をして、いざ支払うときに、家を出るときに持って来た八路軍発行の紙幣を渡したが、受け取ってもらえなかった。負けている側の発行したお金の価値が、こんなに早く通用しなくなるものかと驚いてしまった。

そのまま負傷兵を担いで、以前の満鉄病院まで運んだが、負傷兵が道路にまで並んでいるのを見て同行していた警護の兵隊は、西山の入口にある煤鉄会社の病院に行くように言った。さすがに、西山の奥の方にある病院なので負傷兵はおらずに、ただちに医者のもとに運び入れた。

疲れがどつと出て、床の上で横になりうとうととしていたときに、突然「ギャッ！」という叫び声で目が覚めた。どうやら、麻酔薬無しで体に入っている弾を取り出したらしい。手術後に再び担架に乗せて本溪湖駅まで運んだが、既に列車は来ないとのことで、宮原駅まで運んだ。担架上の負傷兵は、幾度も「マーマー！ マーマー！」と母親を呼んでいた。どこの国の人でも同じで、苦しいときには母親を求めののだなと感じたことだった。

やつこのことで太子河を渡り、宮原駅に着いたのは、真夜中を過ぎていた。列車が来て担架を担ぎ込み、八人の日本人もこの列車で同行せよということになった。

私たちは「腹が減っているので、外で食事をして来る。終わったらここに戻る」と言っただけで車を降り、そこで八人は思い思いの方向に逃げた。それが一緒に苦勞をした八人の最

後で、その後のことは私もまったく知らない。

私は、駅前の中国人の家に助けを求めて、鍋底に残っていた高粱飯のおこげを食べさせてもらい、床の上で眠らせてもらった。五月上旬であり、寒さはあまり感じなかった。うとうととしていたときに、大きな爆発音と共に地響きがして目を覚ました。そのときは事情がよく分からなかったが、帰宅してから承知したことで、このときに太子河に架かっていた橋、鉄橋などすべてが爆破され、同時に発電所も爆破されたのだ。担架を担いで渡るのが数時間遅れていたなら、家に帰ることができなかった。ぎりぎりのところであった。

駅前の中国人の家で一夜を過ごし、夜明けに出た。宮原駅前の広場や道路には、兵隊の姿も無く、朝も早かった。人通りも無く、昨夜とはすっかり違った静かな朝だった。出発のときに集められたスコップがそのまま積んであったので、その中の一つを持って、遠回りをして我が家に向かった。

家族は、私の無事な姿を見て喜んだ。汚れた服を着替えているときに、近くの大和寮が爆破されるといので、

着替えもそこそこに崖下に避難したが、何ごとも無かつた。

担架隊の経験で、戦争による民衆の感情、負傷した兵隊の家族のこと、そして通貨の変動など、戦前の日本人として考えていたことと、経験したことからの、これからの生活に対する考え方がいろいろと変わってきたことを思った。

太子河に架かる橋が使用できないため、国府軍の進駐が数日送れ、宮原地区では市街戦もなく、数日は平穏な日が続いていたが、その反面では電気、水道の無い生活となり、対応に追われる苦難の日々となった。

その日以降、日暮れと共に眠るしかなく、また水道も当然のことながら止まってしまい、中国人部落にある井戸水を日に数回汲みに行くことが日課となった。

六 国府軍の進駐と居留民会の設置

五月上旬には、宮原地区にも青天白日旗をはためかせ国府軍が進駐して来た。彼らは、我々在留の日本人を帰国させてくれるようだということで、旧本溪湖地区と宮原地区にそれまであった日本人会の組織を統括して、「在留本溪湖日本人居留民会」を作った。少年であった私

は、その詳細なことは分からないが、私の住む北地区もその傘下に入って、私は北地区の連絡員と兼ねて居留民会の連絡員となった。

国府軍による新しい軍票が発行され、通貨は旧満州国紙幣を中心としてソ連軍票、日本銀行紙幣、朝鮮銀行紙幣が流通していた。ソ連軍票は、明日から通用しなくなるというデマがよく流れて、最も不安定であった。八路軍のときのような使役はほとんど無くなり、日本人は完全に「竹の子」生活となった。引揚げの際に持って行けるのは、リュックサック一つとのことで、家族五人分のリュックサックを準備して必要な物を詰め込んだ、かなり重い物となった。貴金属は駄目、写真類も駄目などいろいろと制限があるので、結果的には食料品・衣類などが主であった。私は、少々の英語辞書などを持ち帰れるように準備した。

ある日、連絡員として居留民会に出向いたときに、同期の岡元君とばったり出会った。八路軍の野戦病院から脱出して来たとのことだった。北地区以外の同期生と会うのも久しぶりで、いろいろと最近の出来事などを話し合った。その際の話で、良民証がないと本溪湖旧市街の南山地

区は通行できないことを知った。早速に、居留民会事務所に行つて発行してもらつた。

岡元君に会つて間もなく、安奉線の軽井沢とも言われた連山関から、約二百人の老幼男女の一団が、歩いて宮原に到着した。同期の高橋君が団長で、途中で荷物などはすべて略奪されて、着の身着のまままでここまでたどり着いたとのこと。その高橋君が私を訪ねて来た。すぐに連絡をとつて、次の引揚列車で本溪湖を離れた。今でも両君とは年に数回交遊を深めているが、会う毎に引揚げの苦勞話が尽きない。

七 火葬に立ち会う

引揚げ開始に向けての段取りで、大人たちは国府軍関係者との連絡会議などで忙しかつたようで、あるときなどは食事をしながら打ち合わせをしていた、父は通訳として参加していたので、ほとんど食事をする間もなく、多忙を極めていた。

そのように忙しい中での食事が原因で中毒者がでて、北地区の班長が亡くなった。火葬場は、本溪湖の旧市街まで行かなければ無かつたし、その上治安も悪く、遠

方でもあつたし、火葬場に行くことにためらいがあつた。それに、行つても電気も水道も無い状況では、火葬することも難しいのではないかと思われた。そこで、北地社宅から少しはずれた所の女学校の下の池のそばに炉を作って、有り合わせの板で棺を作り、そこで火葬することになった。古畳十枚ほどを池の水で濡らし、棺に重ねた。燃料は電気も使えないので、木製電柱を二本切り倒して薪を作り、それを燃やして火葬した。目の前で人が火葬されるのを見るのは初めてのことだ、大人たちは火の色を見ながら、炉の中は何度ぐらいたどか話していた。燐光の緑色の光を見たのも初めてのことだつた。濡れ畳十枚と電柱二本で人間が簡単に骨になつてしまふことに驚き、もう二度とこのようなことに立ち会うことの無いようにしたいと思つた。火葬の間、みんなは焼酎(中国のチャン酒)を飲んで故人の冥福を祈つた。私も一緒になつて飲んだ。引揚げを目前にして亡くなつたことは、本当に残念なことだつた。

八 引揚げ開始

昭和二十一年七月、引揚げが始まつた。引揚列車はすべて無蓋貨車であつた。あの当時、北は石橋子から南は南

芥までの日本人に、どのようにして引揚げの日時、場所、要領を連絡したのか、今でもよく分からないが、恐らく国府軍の通信網によつたのではないだろうか。本溪湖からの引揚げは、第一次から第十次までの十回に分けられた。引揚列車が出るたびに、中国語による注意事項が示され、父がそれを通訳していた。

私はときどき友人、知人に会えるかもしれないと思つて駅前広場に行ったが、団体以外の者は近づくことができずに、ほとんど会うことがなかった。北地班では、引揚家族名が班事務所に通知されるたびに、連絡員として知らせに奔走した。ときには深夜になつて連絡に回ることもあり、歩哨に「誰何！」されて驚いたが、一刻でも早く知らせたい一心から、恐れずに走り回つた。とにかく、二日ぐらいの余裕しか無いときが多かつた。

社宅の人たちもだんだんと少なくなり、寂しくなつていった。無人となつた社宅からは、残置品が次々と中国人によつて持ち去られていった。

私たち家族は、昭和二十一年九月一日、最後の第十次引揚列車で宮原駅から帰国することになった。リュック

サックを背に、手に持てるだけの物を持つて家を出た。早朝ではあったが、既に家の前には数人の中国人がいた。その者たちは見送りではなく、私たちが家を出た後の残置品を狙つているのだつた。時間が経つにつれて群がり始めた。いつものごとく注意事項が述べられ、それを父が通訳した。一段落しても、父は家族の所に戻つて来なかつた。一団は指定された無蓋貨車に向かつて移動を始めた。みんなが乗車したころにやつと戻つた父は、「これから国府軍が安東を接收するので、一緒に来いと言われた」と話した。もう少しで、私たち家族は取り残されるころであつた。本部署員であつた父のお陰で、私たち家族はただ一両連結されていた有蓋車に乗れて、ほかの人々より恵まれたが、添乗の三人の国府軍兵士も一緒だつた。

当初の計画は安奉線を行くことだつたが、内戦によつて爆破され不通になつたので、遼宮線で遼陽を経由して奉天に着いた。奉天に着くと、すぐに添乗の兵士一人と役員が数人、それに父が加わり、駅構内に向かつた。

今まで情報として伝わつていたことでは、奉天で多分下車させられ、数日間、場合によつては一カ月近く止めおか

れるということだった。

下車した父たちは、いつになっても戻って来ないので心配したが、三時間ぐらいいして全員戻って来て、「二時間後には出発する」とのことだった。多分、奉天駅を管理している幹部を接待し、袖の下を渡したのであろう。

列車は予告どおりに発車して、真つ暗な中を一路葫蘆島に向かって走り続けた。途中何も見えない広野のど真ん中で、突然に停車した。機関車にいた二人の中国人が、本部車両に来て金を要求した。添乗の兵士も、その要求に応ずるように促していた。そのようなことが、二、三度あったように思う。

出発してから二日ほどで葫蘆島の収容所に入り、本溪湖でのそれぞれの地域毎にまとまって、荒れ果てた宿舍に落ち着いた。この収容所にいたのは、五日ぐらいいったか一週間ぐらいいったかは今になっては定かではないが、何をすることもなく過ごしていた。昼間は鉄条網ごしに食べ物や飲み物を中国人から買ったり、同期生を誘っては収容所内を歩き回るなどで過ごした。通常の生活では、全く許されないような行動であった。その中で驚いたことの一つ

には、私たちよりも早くにここに到着しながらも、いまだに引揚船に乗れない一団のいることだった。ここに着いてからもう三週間ぐらいいなることとで、すっかり疲れている様子だった。

私たちは、幸いにも間もなく乗船することになった。道路上に荷物をきれいに一列に並べて、荷物検査の準備をした。中国側の検査官はその対応を非常に喜び、「このように統制のとれた団体には、約束を破るような者はいない」と言い、さらにほとんど荷物の無いような班を見て、これまでの苦勞を謝して、今までに押収した衣料品などを与えてくれた。第九次までの人に会ったときにこの話をしたが、そのようなことは一度も無かったようだった。私たちは、リュックサックの蓋を締めるだけで済んだ。

この収容所で、同期生の江川君の父君にお会いした。この方は煤鉄会社の病院の院長をしておられたが、第十次が本溪谷湖からの最後の引揚グループであることを知り、一緒に引き揚げることになったのだった。

引揚船は、リバティ型輸送船だった。江川先生は私たち家族と同室になり、私のご子息と同期生であることを知

らされた。船内では先生の鞆持ちとなって、検診に回られる先生のお手伝いをした。

昭和二十一年九月二十一日に、佐世保に上陸した。すぐに南風崎の元海兵団の隊舎に入った。そこで、一人持ち帰り限度の千円を、新しく発行された新券十円札で五人分を交換した。たまたま父が五十銭の日本紙幣を数枚持っていたので、帰郷先の親戚に電報を打った。私のほとんど初めてというべき内地への旅は終わった。

本溪谷湖から約三週間の引揚げ行動であったが、引揚列車、そして引揚船共に、ほかの多くの人たちよりは恵まれていた。引揚船に乗るまでの葫蘆島での収容所生活を除けば、九月一日に本溪湖の宮原駅で引揚列車に乗るまでの間の、宮原北地区でのソ連軍、八路军での使役、そして生まれ育った所での一年余りにわたる敗戦国民としての生活が、命にかかわる最も危険な期間であったと思う。

あとがき

こうした生死を巻き込むような体験は、そうあるものではない。とにかく日本の国として開闢以来の出来事であ

る。しかも外地にいたということは、いわば敵地の中で右往左往しているような状態であった。

少年の目から見た大人たちは、自らの非力を露呈し、他人のことなどは構っておられない。自分の家族を守るだけが精いっぱいという敗戦直後の状態の中で、無事に帰国できるまでに立ち直った本溪湖在留日本人は、本当にすばらしいものであったと私は今でも思っている。「負けたのだから、仕方が無い」というのは当時よく聞いたせり、だった。そのとおりであったかもしれないし、反面言いわけであったかもしれない。こうして一年余りを過ごした中であつて、大部分の大人たちの不様な姿を見ながら、降りかかってくる四圍の状況に立ち向かっていた少年・少女は、恐らくこの年ごろでは経験することのできない、人間の裏表を否応無しに見せつけられた。そうした経験を、胸の奥底にしまい込んで生きてきた。

私たちの一年余りは、本溪湖という狭い範囲でのことである。あの八月十五日以降、多少の混乱はあったが、北満のような集団的殺戮や放浪には遭わなかった。悲惨な被害を受けた人たちには申しわけないが、本溪湖地区は比

較的に治安も良い方であったし、多数の犠牲者もでなかった。しかし敗戦国民という事実は、平等に降りかかってきた。戦争に負けたらどうなるのか？ という認識も、どうすれば命を全うできるのかという知恵も無かったことは皆同じであった。

半世紀以上も過ぎたことを思い出すことは、普通ではなかなかできないことであるが、しかし不思議なことには、あの一年余りのことは鮮明に思い出すことができる。ただ、正確な日時や場所などが記憶から脱落していることがある。これは年齢的に致し方ないことだろう。

銃弾の飛び交う戦争を知らない少年が、他国の争いに最前線まで担架隊としてかり出され、また十五、六歳の少女は看護婦として徴用され、七、八年間も連れ回されるなど、当時の少年少女にとっては苦難の時代であった。まったく許し難いことであった。

引揚げ後のことだが、私の妻は宮原の満鉄の社宅で終戦を迎え、同じ引揚列車で葫蘆島に行き、引揚船は別だったが私の同期生の大野君の妹である。まさか結婚するなどは夢にも思っていなかったが、同じ本溪湖在住者とし

て共通の思い出があり、六十年が過ぎた現在でも共通の話題があるということは、最高の幸せである。

戦後六十年、日本は立派に復興したが、敗戦の結果は消えそうでなかなか消えない。いろいろな戦後処理の複雑な問題解決を積み残したまま、歳月はどんどんと進んでいる。私たちの体験にも、積み残しているものがあると思う。その問題解決の一助として、この拙文が役立てばと思ひ、執筆した次第である。

